

第13章 仙台でコミュニティをつくる

宮城県・東北 HIV コミュニケーションズ／レインボー・アドボケイツ東北

小浜耕治さん



実施日：2019年5月21日 聞き手：杉浦郁子・Natasha Fox・前川直哉

実施場所：エル・パーク仙台（仙台市）

【プロフィール】

1962年生まれ。大阪府出身。高校卒業後、東北大学に進み、以後、仙台市で暮らす。東北初のゲイサークル「E-betcha」の立ち上げメンバー。現在「東北 HIV コミュニケーションズ」「レインボー・アドボケイツ東北」代表。

1. 活動に参加するまで

◆25歳まで「なおる」と思っていた

女性の要素がある、という自覚は、幼稚園の頃からありました。たとえば自称が「うち」でした。「うちね、こんなん好きやねん」というような、大阪弁のお嬢様言葉ですよね。女の子の仲間に入れてもらうために、お手玉が流行ったら自作して女の子の気を引くみたいなどころがあったり、虫取りが好きで男の子とも一緒に遊んだり、女の子チームと男の子チームの両方を行ったり来たりしていたんです。

イソップ童話に、戦争をしている鳥の国と獣の国を行ったり来たりするコウモリの寓話がありますよね。獣が優勢なら「私は毛が生えているから獣でしょ」、鳥が優勢なら「羽があるから鳥でしょ」と優勢なほうに行く。その寓話では、コウモリはどちらからも裏切り者だとされて孤立してしまうわけですが、私はその寓話を「獣とも鳥とも仲良くできる」と捉えていました。

小学校のほうで男の子チーム、女の子チームがはっきり分かれています。私は男の子とも女の子とも遊べる「両方を意識できる特別な私」という感覚があって、他の子との違いは感じていても、それに対する引け目はあまりなかったですね。

中学から大阪市にある進学校に通いました。中学に入ると、「あいつは女だ」「おかまか」と言われるようになりました。しゃべり方やしぐさ、すべてにおいて「あいつは女だ」と。小学校では「できる子」だったんですけど、進学校に入ると「できない子」「あまり勉強しない子」。とくに英語なんかは勉強しないでいくと何もわからない、という学校だったので、勉強に対するコンプレックスも出てきて内向きになりました。

高校に入ってから、「女性的であってはいけない」という自己規制が始まりました。思

春期で、男の子が好きだということを自覚して、「これは、ちょっとやばいかな」「男性が好きというのは出しちゃいけない」と思い始めて……。これに「女性的だということも出しちゃいけない」という意識が重なって、「そうならないようにしなきゃいけない」と思うようになっていきました。

同性愛に関する情報としては、中学に『薔薇族』をこっそり持ってきていた同級生がいて、とても見たかったのに我慢したことを覚えています。情報が乏しかったから、通学中の電車で男性の痴漢に触られることがあっても、嫌悪感よりも、「ああ、そういう人もいるんだな」という安心感のほうが強かったかもしれない。それから大学に進学してからの帰省中にですが、「薔薇族映画館がオープンしました」という情報が週刊誌の中吊り広告に載っているのを見ました。堂山の入り口にある映画館で、「東梅田ローズ」というところです。

「自分は同性愛というものなんだ」「ホモというものなんだ」という意識は、大阪にいた当時にすでにありました。でも「そうだと認めてはいけない」「誰かに言うてはいけない」と思い、高校のときは男性に初恋をしながら、仲良しチームの中の気の合う女性と何となく付き合っていました。大学に入って仙台に来てから、彼女に告白の手紙を出し、彼女から「私も好きです」という返事をもらったりもした。大学的时候は「付き合いを始めたら情が移って好きになるだろう」という意識が強くなって、女子大の子からアプローチがあつてちょっと付き合ってみたり、こちらから「付き合しましょう」と言ったことがありました。

「女性と恋愛を始めれば、私も結婚して家庭をもてる」、もっと言うと「ホモがなおる」というような意識はずっとありました。25歳ぐらいまで。25歳というのは、高校で好きになった彼が結婚した頃で、いろいろなことがうまくいかなくなっていく頃です。

◆29歳、ゲイバーに行く

古生物の研究で修士のあと博士課程に上がったのですが、だんだん「種とは何か」という認識論的な問い、科学哲学的な分野に傾倒して、データが出せず悶々とし、将来どうなるかもわからず、生活が荒れてきた。付き合っていることになっていた女の子とも別れることになって、しんどいときに差し掛かったのが20代の後半でした。

同性に対する気持ちを押し込めるのも限界にきていました。だからといってゲイ雑誌を手元に置くことはかたくなに拒否していて、本屋で手に取って、ぱらっと見て、すぐ置いて逃げる。「エロスをなるべく遠ざける」ということをしていたんですね。80年代半ば頃のアメリカのエイズ報道や、1991年1月のOCCURの東京都提訴のニュースなどは「いかがわしくない」から見ていたんですけど、それでエロスを感じてしまって自己嫌悪する、というのを繰り返していました。

そういう状況から抜け出すきっかけとしては、別冊宝島『変態さんがいく』（1991年12月）の伏見憲明さんの文章です。帰省したときに高校のときの友だちに紹介されて、それは「エロスではない」ということになって買いました。文芸雑誌に載っていた『潮騒の少年』（John Fox 著・越川芳明訳）という小説も読みました。そして、1992年の正月に帰省したときに、衝動的に薔薇族映画館に行くんですよ。そのあと仙台へ戻る途中、乗り換えた上野駅の書店で『さぶ』を買い、帰りの新幹線で熟読し、『さぶ』に広告が出ていた仙台のゲイ

バーに行った。いっぱいいっぱいになっていたものが一気にあふれ出たんですね。29歳でした。

ゲイバーでは、オネエ言葉という形で女性的な自分を解放できた。ぎりぎり20代でそこそこモテて、お持ち帰りしてもらったり、けっこうおてんばしました。

2. ゲイサークル、HIV 啓発活動に参加

◆「E-betcha」創設（1992年）

ただ、ゲイバーに行っても、「早く慣れなきゃいけない」という感じで、「ここが私のワールドなんだ」という感覚はもてなかった。あるとき『アドン』に「ILGA 日本札幌ミーティングの名古屋グループ、仙台で合宿」という告知を見つけて（1992年6月）、申し込んでみました。サークルに参加するのは初めてで、とても緊張しながらも、「昼間にいっぱいこんなたくさんのゲイがいる」と感動しました。

合宿は8月30日までで、その翌日に合宿に参加した東北在住のメンバーで集まって、8月31日にサークル「E-betcha（いいべっちゃ）」をつくりました。正式名は「仙台ユニット E-betcha」。「ゲイでいいべっちゃ」。仙台弁で「ゲイでいいじゃない」という意味です。サークルの初代代表は大学生で、私は1年後に二代目の代表になりました。

サークルの活動は、月1回、日曜の午後の交流会です。確か「ライフスタイルを考える会」と名乗って、公共施設を借りていました。8月31日にすでに10人は超えていましたが、交流会には毎回新しい人がどんどん来て、あっという間に住所の交換したのが100人を超えました。二次会は居酒屋ですごく盛り上がっていましたが、オープンリーの人はほとんどいなかったですね。

◆「東北 HIV コミュニケーションズ」の立ち上げ（1993年）

1992年から、HIV 啓発予防活動に参加するようになりました。1990年にメモリアル・キルト・ジャパンが創設されて、加藤哲夫さんが1991年にエイズメモリアルキルト仙台展を開いています。そこには、岡山のゲイ・レズビアングループ、「P3」つくったケネスさんが関わっていました。E-betchaのメンバーから「キルティング・ビー（Bee）」が発足すると聞いて、加藤さんの自然食品店「グリーンピース」を訪ねました（1992年12月）。

キルティング・ビーの活動はキルトを縫いながらエイズについて話すというものですが、他に「エイズ・ワークショップ」というものにも参加しました。自分とエイズの関わりを語る、というものです。「共に生きる社会」というのは、まずは、自分のことを語る場から始まるんだ」ということですね。いきなり「社会を変える」というよりも、「ちゃんと自分事として語る社会を広げていこう」というスタンスの活動です。フェミニズムのコンシャスネス・レイジングがありますが、似たコンセプトです。

エイズ・ワークショップは、ゲイだけをターゲットにしたものではないのですが、私にとっては、セクシュアリティの話をどう自分事として語れるかということが重要でした。「ゲイはまだしも普通の人は」という言い方、「ゲイは特別な人たち」という捉え方をする人が

いる中で、「私はゲイです」と話すとみんながワッと驚くとか、そういうことはよくありました。身近にゲイがいるとは思っていない。透明人間状態ってやつです。

1993年12月には電話相談が始まりました。「HIVと人権・情報センター（JHC）」が全国に呼びかけ、キルティング・ビーに関わった人たちで実行委員会をつくり、相談を始めたところ、感染不安の電話が100件近くかかってきた。感染不安で相談してきたのは、薬害被害の人ではなく、異性間または同性間の性行為で不安をもった人がほとんど。これで東北にも多くのニーズがあることを確認し、すぐに「東北 HIV コミュニケーションズ」を立ち上げることになりました。ミッションは「HIV エイズによって、自らの生命や生き方に影響を受けた人が共に生きる社会をつくる」、ターゲットは、同性愛、異性愛、薬害も含め全てです。

東北 HIV コミュニケーションズの活動は、電話相談、講演、イベント、ワークショップなどです。1994年から常設の電話相談を始め、その8月には横浜のエイズ国際会議。そこで2回目のキルト展、さらにジャパントアという形で全国を回った中、仙台でも開催されました。1995年には「東北・HIV 訴訟を支援する会」の講演会。17歳の川田龍平さんが来て、櫻井よしこ氏が講演をしました。右から左まで薬害エイズに関わってたんです。仙台の市民会館で、1,000人ぐらい来ましたね。

◆親に活動のことを伝える

活動を通して「世の中には、大学ではわからないことがこんなにある」と思いました。ILGA 日本の南定四郎さんや札幌ミーティングの鈴木賢さんにも出会って、「ああ、こういう人生があるんだ」と。そんな思いや人間関係に突き動かされて、「こっちでやってみるのもいいのかな」と考えるようになりました。研究で先が見えないのと、活動で先が見えないのと変わらない。「もう大学のほうは諦めて、いろいろ自分でやっていく」と実家に話したのが95年でした。

1993年に出会った今のパートナーとは、95年から同居を始めているんですね。仕送りをもらう生活から抜け出さなければならぬので、95年から塾の講師を4年間、99年からは、NPO 法が施行され仙台市市民活動サポートセンターができたのでその職員になり、宮城県断酒会のグループホームで働き、市川班（後述）の研究補助員として働き……。企業に勤めるイメージはなかったです。地学でつぶしのきくところはないものだと思っていました。大学でのうのうと生きてきた人間が仕事なんてできるのかな、という不安もすごかったです。

1995年に塾の仕事を始め、両親に活動のことを伝えて、「もう仕送りはいりません」とやっと言えた。ところが父親から「エイズと同和と共産党はやめとけ」と言われたんです。薬害の裁判で共産党系の弁護士さんとお付き合いがあり、HIV 予防啓発をやり、人権のことをやっている、「全部やってます」みたいな状況でしたから、「これは親の影響をなるべく受けないようにしないと駄目だな」と思ったんですね。それまでは、親は親としてちゃんと尊敬しなければいけないと思っていたのですが……。実家と距離を置くようになり、仙台での彼との生活を固めていくことに意識が向かっていきました。

大阪に帰ると、巻き込まれるからやっぱり駄目ですね。仙台は居心地がいいんですよ。高校の友だちもほとんどいないし、親戚もない。ある程度、人との距離がある。1992年あたりから大学の友だちとも疎遠になって、人間関係が完全に入れ替わりました。加藤哲夫さんの人脈の中で、オルタナティブな生き方とか、社会変革とかを志向する人たちに囲まれた。自分のメインテーマはセクシュアリティだと見定めて、この人たちと一緒にやっっていこうと思いました。

3. 東北地方の動き

◆1990年代

1993年にE-betchaの代表になるにあたって、いろいろな団体とつながっていきたくて思い、「E-betcha 1周年、ありがとう温泉旅行」という企画をやりました(1993年8月)。そこには、札幌、仙台、名古屋のILGA日本関係の団体、前田邦博さんがやっていた東京の「Together」、大阪は「OGC」「上方DJ倶楽部」「ぶあぶあ」などから人が集まりました。「上方DJ倶楽部」「ぶあぶあ」は「G-FRONT 関西」の前身ですよ。PWA(HIV陽性者)とカミングアウトしていた平田豊さんもいました。50人ぐらいで蔵王の御釜に行って、みんなで「おかまが御釜に来たわよ～」とやりました。全員ゲイ男性。濃いでしょう。そんな経験をする「ネットワークって面白いな」というふうになりますよね。

他の地域の活動を参考にしながら、「仙台では何ができるかな」と考えていました。全国に広がりつつあるゲイリブ的な活動に追いつかないと、という意識もありつつ、仙台でやることは全部初めてのことだから、「いつもパイオニアよ」と思っていました。

E-betchaはゲイから始まりましたが、他のセクシュアリティもOKで、レズビアン、バイセクシュアル女性もいたんです。そのうちに、「クレプスキュール」という女性のグループができ、以前からあったレズビアンの読書会「うさぎ文庫」と交流をするようになりました。1994年に「伏見・掛札LOGキャラバン」を仙台でやったときは、レズビアンの人たちと一緒にやりました。それが終わったあと、「仙台セクシュアルマイノリティ連絡会ぼのぼ」を作った。ボノボは、同性愛行為をする、チンパンジーに似た人間にいちばん近いおサルさん。市民に向けてもセクシュアリティのことを発信していこうと、90年代後半に『ぼのぼの森』というニュースレターを3、4回出しました。

この辺の動きは全部仙台ですね。ただ、人は、岩手から来たり、福島から来たり、山形もいましたね。仙台以外の出身で仙台に住んでいる学生とか。仙台出身でない人のほうが多かったですね。地元の人にはゲイバーのほうにいました。地元のゲイバーには、「サークルがなんか勝手なことをやってる」と見えていたようで、ちょっと煙たがられていました。

90年代後半には、『G-men』や『Bádi』にもHIV関連の記事が載り始め、OCCURやHIVと人権・情報センターもゲイ向けのHIVホットラインをやっていた。東北HIVコミュニケーションズでも、薬害訴訟がひと段落した頃から、E-Betchaのメンバーの協力を得て、ゲイ・ホットラインを何回かやりました。

秋田を拠点に活動するESTOの真木柁鷹さん(本冊子にインタビュー掲載)のことを知

ったのも90年代後半です。埼玉医科大学の性別適合手術が話題になる、ちょっと前のことなんですよ。 「トランスジェンダーの人が活動しているらしいよ」ということで、ぼのぼの女性グループの人たちが真木さんに会いに行きました。

◆2000年代前半

90年代終わりから2000年代初めに、HIVの報道量が一気に減ったのですが、でもその時期に、「MASH大阪」(1998年)、「MASH東京」(2000年)、「Angel Life Nagoya」(2002年)などが始まっています。啓発イベント「SWITCH」(2000-2002年)もです。昼間のゲイバーでアート展をし、堂山の端っこのところでHIV検査をし、次の日には結果を知らせるという事業が、市川誠一先生(名古屋市立大学)率いる研究班との協働で始まりました。仙台で、市川班との連携が始まったのは2004年から2005年にかけてで、それは今も継続中です。

私が東北 HIV コミュニケーションズの代表になったのは、2003年です。10周年でしたし、代表として何かやりたかった。でも、HIVの活動は、マスコミが注目しなくなり低調になっていて、なかなか広がり生まれません。そういう中で、当事者性の強い活動がやはり必要だと思い、ゲイ・コミュニティ向けの活動を始めました。いわゆる Community Based Organization (CBO) です。そのために、2004年4月に「やろっこ」というグループを作り、E-betchaのメンバーにボランティア参加を呼びかけました。

やろっこでは、コンドーム・アウトリーチをしました。ゲイ・コミュニティのイベントでコンドームを配ったり、仙台のゲイ・ビーチで掃除をしながらコンドームを配ったり。それから、宮城県と協働して検査情報カードを作って配布したり、世界エイズデーせんだいの事業でシンポジウムをしたり、NLGR (Nagoya Lesbian & Gay Revolution) がつくった映画の上映会をしたりしました。

今やろっこの代表をしている太田さん(本冊子にインタビュー掲載)は、設立時にいちばん積極的に関わってくれました。彼がゲイ・コミュニティとしっかりつながっていたので、広がりやすくなってくれた。やろっこは、東北 HIV コミュニケーションズの傘下にはありませんが、ほぼ自立的に活動をしています(注:やろっこは2020年に独立しました)。

東北 HIV コミュニケーションズのほうは、綿々と電話相談を続けているんです。相談はヘテロが多いですね。ゲイからもかかってくるんですが、そんなに多いわけではないですね。啓発活動などは、マンパワーもなく、人も集まらないんですよ。もうゲイ・コミュニティがないと人も集まりません。

◆2000年代後半

2000年代後半には、青森で活動が広がりました。2006年に「青森国際ナショナル LGBT フィルムフェスティバル」が開催されて、私も行きました。ちょうど尾辻かな子さんが参院選に立たれた時で、宇佐美翔子さん(本冊子にインタビュー掲載)が決死の覚悟でピラマキをしていたんですよ。当事者から「映画祭なんて大きくやって、駅前の老舗ホテルの部屋で懇親会なんてやって、どういうつもりよ」「そんな華々しいところに当事者が行ける

わけがないじゃない」という声が上がって、「気持ちはわかるよ」「でもやっぱりこういうのが必要だよ」と。そのあと「青森セクシャルマイノリティ協会にじいろ扁平足」(2007年)が立ち上がり、2008年11月には「スクランブルエッグ」が活動を始め、2009年から「IDAHOメッセージ展」(2009年～)が開催されています。

同時期に仙台でも IDAHO をやりました(2009年)。オールセクシュアリティの「Anego」(2007年～)、同性を好きな女性同士が交流する「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」(2010年、本冊子に代表 MEME 氏のインタビュー掲載)なども始まっています。

尾辻かな子氏の参議院議員選挙(2007年7月)のインパクトはありましたよね。でも、やっぱり基本は交流でした。「尾辻さんと呼んで交流する」というかたちです。HIV 以外のことで、社会的な 이슈 をめぐる動きはあまりなかった。同性婚についても、私自身が婚姻制度に批判的で、「同性婚という枠を与えてもニーズがないだろう」「むしろふたりの家族との関係をどうつくるかとか、そういうところの話をちゃんとしなきゃ駄目でしょう」という立場でした。だから、同性婚の問題を仙台でやろうということには、当時はならなかった。

実は、尾辻選挙のあとぐらいから気持ちが沈み、長い鬱状態に入りました。IDAHO でいったん回復したように見えて、それは躁転していただけで。震災までの間、全国に行くような活動はなくなり、仕事もほとんどしないようになって……。 「東北 HIV コミュニケーションズよりもっと大きな傘が必要なんじゃないか」と大風呂敷を広げた話をしてすぐに立ち消えたり、いろいろやりたいけれど空回りしたりして、息切れしてきました。コミュニティの中での人間関係の悪化もありました。私があんまり勝手なことをして、若い子たちを巻き込んで、私が疲弊する、というようなことがあって、「若い人たちは、若い人たちでやってね」と活動から少し離れたんです。

4. 東日本大震災

◆震災直後

震災前ぐらいにようやく回復して、「手に職をつけないと」と介護職員基礎研修に通い始めました。3月初旬開講で、11日が震災でした。

職業訓練校で授業を受けているときに、地震がありました。かなり古いビルで、壁にひびが入り、「ここは危ない」と階段を下りて、外に出た。道には人が溢れていました。夜中にバスが動いたので、乗ったけど、仙台駅までしか行かない。駅には、広い道を埋めるようにたくさんの方がいて、「これは、もう歩いて帰るしかないな」と歩き出しました。

広瀬川を下って行くとマンションがあるので、川沿いに行きました。津波が来るかもしれないのに川沿いを歩くなんて、御法度なんですけどね。歩いていると、正面に煙が上がっているんですよ。閑上の津波火災だと後で知りました。

パートナーからはショートメールが1回だけ届いていました。私も返信したけれど届かなかったようで、帰り着いて、彼と「ああ、よかったね」と。部屋の中は、かきまぜられたようにぐちゃぐちゃになっていた。うちのマンションは、大規模半壊だったのですが、端っこの私たちの部屋は大丈夫で、在宅避難になりました。

電気は一晩、停まりました。3月でまだまだ寒くて、帰り着いて少ししたら雪が降ってきました。石油ストーブを引っ張り出して、暖を取りました。電気は、次の日の夜になって復活した。電気が復活したら、ポンプが動いて水道が出た。ガスはまったく駄目でした。

うちの前の通りは地下鉄が通っているんですけど、地下鉄の埋め戻しのときの砂が液状化して道路が陥没したりとか、広瀬川にかかる鉄橋で新幹線が止まったままだったり、高架の架線の電柱が全部折れていたりとか、そんな状況で。「ああ、もうこれは大変だ、大変だ」なんですけど、ラジオが見つからず、情報は何もない。次の日の朝、情報がほしかったので、近くの小学校の避難所に行きました。新聞の号外が貼ってあって、「マグニチュード8.9」という見出しを見ました。そのあと、公衆電話を見つけ、大阪の実家にも連絡できました。その日の夜には電気が通ったので、そこでテレビをつけて、「ああ、こんなことになっているんだ」とわかった。だから、津波の映像は、リアルタイムでは見てないんです。

幸いなことに、地震の前に、彼の実家からお米を30キロ送ってもらっていて、お米はけっこうあった。食料もいろいろなところから買い集めました。お店の冷蔵庫に入っていた商品を1袋500円とかで投げ売りしていたんです。それで当初の食料は何とかなっていました。

1週間ぐらいで、コミュニティセンターZELが復活したんですよ。やろっこが運営協力しているセンターです。インターネットは比較的早くから通じたので、そこで呼びかけて、みんなで集まって、「ああ、よかったね」と。私は電気釜でお米を2升炊いて、おにぎりを握って持っていきました。

やろっこの太田さんが市民活動の支援をする仕事をしていたため、いろいろな情報をもっていました。「HIVの薬が切れたら、手元にあるだけ飲んで、なくなったらすぱっとやめるというやり方がいい」とか、「ここの病院は大丈夫だから」といった情報を流してくれていました。

◆セクシュアル・マイノリティ固有のニーズ

震災直後に共生ネット（共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク）が「東日本大地震の被災地におけるセクシュアル・マイノリティへの対応に関する要望書」を内閣府に出しましたよね。そのちょっと前に、マサキチトセさんが始めたセクマイのニーズの掲示板も見ていたんです。でも、地元では情報が何ひとつなかった。それで「お願い、あれこれ言わないで。地元のニーズにあがるまでは、あんまり先走って行動しないでほしいな」と書き込んだりしていました。

ただ、セクマイのニーズは、全然わからなかったです。匿名性の高いコミュニティですから、誰が、どこで、どうしているかというのは、なかなかわからなかった。ガソリンがなくて移動が難しかったので、実際に会える人は限られていました。津波の被災地にいた人は、知り合いでは2人ぐらい。石巻に1人、女川に1人。女川の知り合いのことは、本当に心配しました。けっこう経ってから、パーソンファインダーにやっと応答してくれて、無事が確認できた。

これまで経験したことがないことが起こったわけで、セクシュアリティが絡んだニーズ

なんてよくわからない。「みんな大変なんだろうけど、どうやっているんだろうね」とおもんばかるしかなかったですね。大変な人たちには、会えないわけですから。

あとで聞くと、ガスがなかなか復旧しなかったので、お風呂に入れなかった、でも、オール電化の家はあって、ゲイバーのコミュニティの人たちが「うちに入りに来るといいよ」ということをやっていたとか、地元がもう大変な状況になっている、というので苦労して帰ったとか、いろいろな経験談を聞きましたけどね。

でも、やっぱりセクシュアリティに関するニーズはあまり上がって来なかった。事例がいちばん載っているのは、内田有美さん（本冊子にインタビュー掲載）が調べて出した報告書（2015年3月）だと思いますね。実際に目に見えるのは、トランスジェンダーの人たちのニーズ。避難所のトイレやお風呂です。自衛隊がお風呂を提供してくれましたが、「男風呂、女風呂」なわけで、それを使えない。

うちは、以前から「あそこは、男ふたり暮らしだね」というのは周知の事実でした。彼と一緒に生活の基盤を築いて、マンションの人とも積極的でないにせよ、顔を合わせながら生活していた。地域とのつながりもそれなりにある生活ができていたので、あんまり困ることも、心細く思うこともなかった。隣は高齢女性のひとり暮らしで、「いろいろ大変じゃないですか」と同じ階で声を掛け合っただけで気にかけてくれたりしたので、ご近所付き合いが増えたということがあったのですが、「ここでカミングアウトしなきゃいけない」といったこともなく、不審に思われることもなく過ごせたんです。だから、私自身のセクシュアル・マイノリティとしての苦労というのは、表面的にはそれほどなかったですね。

◆津波被災地へ

私自身やっと回復してきたときでした。以前だったらいけいけで震災復興の活動をしていたと思うんですけど、あのときは、「しちゃ駄目だ」「したら絶対つぶれるから、まずは、自分のことだけするように」と自己規制したんですね。セクマイのニーズも聞いたら動いてしまうので、「聞かないように」と。ちょっと冷たいですが、そのようにして自分を守っていたところがありました。

津波被災地の多賀城に初めて行ったのは、2011年の秋でした。「レインボー・エイド」という救援団体が仙台に来たとき、多賀城の市民活動サポートセンターの知り合いや「てんでん宮城」の namihei さんに、地元の状況を聞きながら案内しました。

その後、姉が冬に来たんですね。姉は大学の教員で、東松島出身の学生のために被災状況を見たいので案内してほしいと言われて。塾の講師時代に石巻の教室で教えていたので、土地勘もあった。がれきが積みあがっているような状態で、「9 か月経ってもこんな状態なんだな」とか、「あのあたりから通ってきていた子がいたな」と思いました。津波で被災した地域に行くことは、避けていました。私みたいなのが軽々に見に行くようなところではないし、やっぱり見るのが怖くて行けなかった。でも、「外から人が来るなら」「そういう機会なら」と思って、案内をしました。

大阪のゲイの友人と合流して、女川にも行きました。ちょうど女川の復興のお祭りをしていたから、あれは2012年2月だったと思います。女川のことは、加藤哲夫さんと一緒にや

り始めた当初から、原発の立地問題で注目していたところだった。原発で引き裂かれ、津波で引き裂かれ、という状況を見て、何だか沖縄と重なった。それで「あ、これは平良愛香さんに会いに行かなきゃいけない」と思って、4月になって会いに行きました。

「引き裂かれる」がキーワードだったんです。自分のセクシュアリティを言う活動と、それを言わない地域での生活とを使い分けているわけですよね。でも、使い分けているうちに、自分がバラバラになる、引き裂かれるということです。「それを意識的に統合していかないと、やっていけない」「信仰とか、霊的なもので統合することを考えていいんじゃないか」と思ったら、平良さんの顔と沖縄と一緒に浮かんだ。平良さんとのことが、自分のあり方にすごく影響して、教会に行き始めました。

震災のときは、自分のことは自分でやらなきゃ始まらない。それで、もう源氏名は捨て、「小浜耕治」で活動するようになりました。統合された自分がどう社会と向き合うか、という意識で動く。片手間にはなく、活動が生きることそのものでないと生き残れない、という意識になりました。

5. コミュニティ、ネットワークづくり

◆新しい動き

コミュニティがないと、平時のネットワークがないと、有事の対応ができない。これは加藤哲夫さんの言葉なんですけど、神戸の地震のときによく聞かされました。「もともとネットワークがないところで何かをやらうと思っても何もできないよ」「だから、つながっていいよ」という意識がとても大切だね」と。

真木さんの ESTO は、会員の名簿があるので、生存確認をすぐさまやって、被災したところに物資を運ぶ活動をしていた。でも、物資を持って行っても「なんでもらってるの」という話になるわけですよ。家族のいるところで、どういう伝手か言えないものを自分だけもらえない。そういう難しいことを経験して、やはりコミュニティの厚さがないと対応できない、とそれぞれに痛感したんじゃないかな、と思うんですね。

山下梓さん(本冊子にインタビュー掲載)が震災直後に「岩手レインボー・ネットワーク」をいち早く立ち上げて、それに参加して「自分もつくりたいと思った」という人の話も聞いた。その後に「てんでん宮城」ができた。気がついたら、あちこちにいろいろなグループがあった。おそらく「自分の周りで集まれる人たちのプラットフォームをつくっておかない」ということがあったと思うんです。あるものに参加するだけでなく、求めるものをつくるようになった。

私は、2012年から東北 HIV コミュニケーションズで「支え合う学習会」というのを月例で始めたんですよね。「セクシュアリティと HIV、性的自立」「セクシュアリティとメンタルヘルス」「セクシュアリティと家族、虐待」というように、何らかの 이슈をセクシュアリティの視点から考える勉強会を連続でやったら、そこにいろいろな人が参加してくれて、参加した人が気づいたらグループをつくっていた。みんなの顔が見える場があり、それぞれで動き出した、というのは、すごく感じていましたね。

◆「レインボーアーカイブ東北」「レインボー・アドボケイツ東北」

震災で何もできなかった。どんなことになっているのかもわからなかった。コミュニティの厚みを増して、いろいろな人が関わる素地を作らないとニーズもわからないし、何もできない、ということ突き付けられたわけです。何かあったときのために、というか、何かは必ずある。平坦な日常が続くだけではなく、この世の中、何があるかわからない。コミュニティは、それを乗り越えていかなければいけない。そういう問題意識で「震災とセクシュアリティ」というテーマのシンポジウムが何回かありました。

でも、やっぱり「よくわからない」「何もできない」「普段のコミュニティのつながりが試される」という結論だった。それで「これは、もう、一人一人がどうだったのかを集積しておくしかない」ということで、手記を集める活動をする「レインボーアーカイブ東北」(2013年)が始まりました。それは、せんだいメディアテークの「3がつ11にちをわすれないためにセンター」に関わっている人とのつながりから、「何かやりましょうよ」ということで始まったんですね。

私自身も「コミュニティをつくるという意識がないと、こういうときに何もできないんだ」と本気になってきた。それは、ぼつぼつとやっても駄目なんですよ。定期的にやらないと育っていかない。それに、いつまでも交流ばかりしていてもしょうがない。何かアクションを起こすことをこれからは考えなきゃ、というところで「ちょっと本気でやらなきゃできないぞ」という覚悟が決まった、というのがありますね。

同性パートナーシップに関連して最初にやったアクションは、住民票続き柄の問題です。「未届夫」「未届妻」という記載を事実婚の異性カップルは使えるけれど、同性カップルが使えるわけではない。同一世帯にはできるけれど「同居人」という記載で、他人が無理やり同一世帯になっているみたいで……。それで外国人同性婚パートナーが使う「特別縁故者」という記載を使えないか、と思った。市長宛てに「仙台の同性カップルを、社会的な存在として認知できるような続き柄は使えないでしょうか」「市では性的マイノリティについて、どういうことが必要だと思っているのか、あわせて教えてください」と質問状を出しました。回答が来るタイミングで記者会見を開き、そこに「小浜耕治」で出た。そのあたりのことを本格的に始められたのが2015年です。

その頃「LGBT法連合会」ができ、「じゃあ、そこに賛同する政策提言団体として、何か名前があったほうがいいよね」ということで、「レインボー・アドボケイツ東北」(2015年)をつくりました。最初のもくろみでは、東北のネットワークづくりを目指していたんですけど、東北は広いし、それぞれの地域での活動がある。全体のことよりも、まずは足場を固めないと何もできないので、私は、まずは地元の仙台市議選、宮城県議選の議員アンケートをしました。ちょうど統一地方選のタイミングだったんです。

◆コミュニティの課題

東北に限らずどこでもそうなんでしょうけど、コミュニティになっていないわけですよ。個人でやっていたのがやっとなり始めたぐらいで、それも、本当に危ういわけですよ。コミュニティを代表している、という存在ではない。

それから、地域で埋もれざるを得ない人とつながるツールを持っていないのが、いちばんの問題だとやっぱり感じますよね。「ゲイバーに来るときだけ」というパートタイムのゲイの人たち、パートタイムでもゲイになれない人、レズビアン、トランスジェンダー、Xの人なども含めると、いっぱいいるはずです。ネット上ではつながれても、生身で地域とつながっていない人が圧倒的な中、地域でどう一緒にやっていくのか、どうつながっていけるか、という課題。雲をつかむみたいで、どうしたらいいのかはよくわからないんですけど。

「よりそいホットライン」(2012年～)が始まって、発達障害であるとか、精神疾患であるとかで、コミュニティからも疎外されてしまう人が、いちばんしんどい思いをして電話してくる、ということがわかった。孤立している人たちと、どうつながりをもったらいいいのか。でも、「そこをしないと駄目なんだ」「そこをやるんだ」という覚悟が、震災で、決まった感じはします。

それにしても、昔は「砂漠に水をまくようだ」と言っていたんですけど、やってもやってもなんか1人でやっている感じ、いつものメンバーでやっている感じだったんですけど、最近は、何かをやったら必ず新しい人とつながっていているな、という感触はある。おとといのイベント「せんだいレインボーDay 2018」でも、初めて来てくれたボランティアの当事者がけっこういた。「OUT IN JAPAN」(2016年)のときにも、「東北レインボーSUMMER」(2015年、2016年)のときにも、できつつある小さなグループが交流して、つながれた。状況は変わってきて、やっと始まったんですよ。

コミュニティ、ネットワークづくりを進めていく素地はできたと思うんですけど、でも、先は長そうですね。地域で自己肯定感をずたずたにされながら生活している人たち、震災のときには我慢するしかなかった人たちと、どうつながるか。それがわからないと、震災とセクシュアリティの問題は語れないわけでもんね。東北の、というか、どこでもそれが課題なんだろうなと思います。

* インタビュー後に活動の展開がありました

「せんだいレインボーDay 2018」は、仙台市市民協働事業提案制度を活用して、男女共同参画課と協働して実現したイベントです。事業全体では「にじいろ協働事業」と言って、スピーカー派遣、コミュニティスペース「にじのひろば」、ニュースレター発行も行いました。市民協働事業提案制度は単年度事業で1回のみ継続で、2019年まで活動しました。60人を超えるボランティアが集まり、民間で活動を継続しようと「にじいろ CANVAS」が発足しました。仙台市では「にじのひろば」を継続し、研修も仙台市の全体研修を行っています。

レインボー・アドボケイツの活動としては、2019年からパートナーシップ制度やトランスジェンダー支援について仙台市議会各会派を回ってレクチャーさせてもらっています。2020年10月にはパートナーシップ制度についての陳情書を提出しました。公明党市議団の皆さんに協力をいただいて、仙台市議会議長に直接手渡すことができました。メディアでも取り上げられ、反響を得られたのではないかと思います。

仙台市の基本計画、「男女共同参画せんだいプラン 2021」の策定の年で、次期計画にこれ

までの成果をさらに進めるような項目を盛り込むため審議会を傍聴しています。中間案の原案は示され、まとまった項目が盛り込まれることとなっており、12月の市民意見交換会とパブリックコメントが山場だと見据えているところです。

新しい団体「にじいろ CANVAS」では、当初はパレードの開催を予定していたのですが、コロナ禍で中止となりました。11月の男女共同参画推進せんだいフォーラムでツイキャスを配信するイベントを予定していて、その準備を進めています。

仙台の活動が、また新たなステージに上がったと感じています。